About Us

上廣死生学・応用倫理講座は、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター内におかれた寄附講座です。公益財団法人上廣倫理財団を出捐団体としています。本講座は 2007 年度に開設され、これまで臨床死生学および臨床倫理やケア倫理、生命倫理等の応用倫理を主たる担当領域として、研究と教育および実践活動を進めてきました。

2026 年度はこれまでの 3 期 15 年間の実績を踏まえ、第 4 期の 5 年目に入りました。今年度は後期に山崎浩司特任教授が本講座に着任し、新たな体制・方針で一層の研究展開と社会貢献を進めてまいる所存です。

死生学は単に「死について」の学ではなく、死を生に伴い、また生が伴うものとして、「死生」を一体として考え、人間が死生をどう理解し対処してきたかについて、人文知を背景に広く考えようとします。その意味で東京大学の死生学研究は 2002 年以来、死生学を "thanatology（死の学問）というよりも "death and life studies" として捉え、人文社会系を中心とする学際的な研究プロジェクトを進めてまいりました。

本講座の活動は、日本における死生学の中核領域である臨床死生学と臨床倫理の研究と実践活動を軸に、これまで展開してまいりました。臨床死生学は臨床現場で実践の知としてはたらく学問です。医療機関や介護施設、在宅医療・介護の場などの医療とケアの現場において、死生をめぐる諸問題に関し、患者 / 利用者本人と家族等および医療とケアに携わる人々のニーズに応え、死生学が得た知見を医療とケアに活かすことができるようなかたちにして提供しようとします。その際、判断の土台となる医学的な新知見も適宜取り入れます。

臨床倫理は臨床現場において、ひとりひとりの治療やケアや療養場所などの選択に際し、本人を人として尊重する意思決定の実現を目指します。その実践的研究の成果は医療・ケアの臨床現場に浸透しつつあり、高齢者医療・ケアの領域などで実績をあげてきました。

以上に加えて、社会学的視座に立脚し、関係性、制度、文化、環境など、生と死をとりまく広い背景・文脈にも目を向ける社会死生学の研究・教育を展開します。また、医療・ケアの実践家を含む当事者が、質的研究等を実施して自ら知を生み出す力を身につけ、高めていくことも支援してまいります。

このように、上廣死生学・応用倫理講座は文理融合の知を創出しつつ、死生学・応用倫理センターのメンバーの協力も得て、バランスのよい研究・教育・　実践活動の展開を目指しています。

上廣死生学・応用倫理講座

特任教授　会田 薫子　　特任教授　山崎 浩司

Activities 01

臨床倫理プロジェクト

本講座のおもな研究・実践活動の 1 つは『臨床倫理プロジェクト』です。「臨床倫理」は、医療・介護の現場で、医療・ケア従事者たちが、患者 / 利用者本人や家族と応対しながら医療・ケアを進めて行く際に起きる諸問題について「どうするのがよいか」を、本人を中心に考える営みです。本プロジェクトは次の 3 点をおもに目指しています。

●日本社会の文化に合った臨床倫理の考え方と検討の方法を見出し、それを普遍的に理解できる言葉で表現すること。これまでの研究の成果である、「カンファレンス用ワークシート」などの臨床倫理検討シートを用いた事例検討の演習を、全国各地で行っている臨床倫理セミナーに組み込み、現場における実装を目指すこと

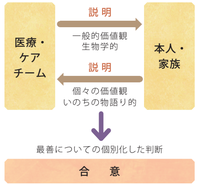
●現場の医療・ケア従事者との協働で実践的研究を進め、医療・ケアの質の向上、今後の医療・ケアの望ましいあり方の実現に寄与すること

●医療・ケアの現場で死生の問題をどう考えるべきかという臨床死生学の課題を臨床倫理的に検討すること。それによって新しい時代の看取り文化の創成に貢献すること

本プロジェクトの基本的なコンセプト

●意思決定プロセスの「情報共有―合意」モデル

医療・ケアを提供する側が有する情報と医療・ケアを受ける本人・家族側が有する本人の生活と人生に関する情報を互いに提供して共有することをベースにしつつ、コミュニケーションを通して合意形成を目指します。これは清水哲郎前特任教授を中心に、国内の医療・ケア従事者と 30 年にわたる協働によって開発された、国内独自開発の共同意思決定 (SDM：shared decision-making) のモデルです。



●生命の二重の見方

私たちのいのちには、生物学の対象になる身体的生命という相と、自分のいのちの物語りを創りつつ一歩一歩進む人生という相があります。身体が支えてくれなければ、人生は展開できません。ですから、人生を豊かに展開するために、生命を整える必要があるのです。

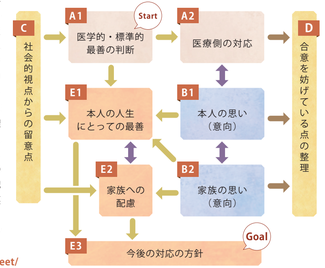
臨床倫理セミナー・ファシリテーター養成研修の開催

「臨床倫理プロジェクト」の活動として、全国各地で医療・ケア従事者のための臨床倫理セミナー・ファシリテーター養成講座を開催し、基本的な考え方のレクチャーと事例検討の演習を行ってきました。2020 ～ 2022 年度はコロナ禍のなか対面研修を制限する一方、e-learning コンテンツを公開し、リモート研修も実施しました。2026 年度はリモート研修の継続とともに対面研修の再拡大を目指します。右記は事例検討の演習で使用している臨床倫理検討シート（カンファレンス用ワークシート）です。

検討シートを用いて分析する臨床倫理の方法は、『臨床倫理の考え方と実践 ― 医療・ケアチームのための事例検討法』（東京大学出版会、2022）に記述しました。同書については本リーフレットの裏面もご参照ください。

臨床倫理検討シートは、以下のサイトからダウンロードできます。

http://clinicalethics.ne.jp/cleth-prj/worksheet/



Activities 02

意思決定支援ツールの開発と死生に関する思想的・倫理的研究

医学・医療が目指してきた生存期間の延長は寿命革命につながりました。他方、さまざまな加齢変性を抱えながら最期へ向かう過程において、医療のためにかえって本人の苦痛が増す場面もみられるようになりました。多くの人にとって人生は長くなりましたが、老衰の進んだ超高齢者に負担となる医療行為が行われることも多くなりました。私たちはこのジレンマにどう対応すべきでしょうか。

本講座ではこの課題に関して、さまざまな取り組みを行ってきました。その成果として、まず、日本老年医学会「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン ― 人工的水分・栄養補給の導入を中心として」(2012) への参画が挙げられます。次いで、この課題を本人と家族らの視点から捉えて意思決定を支援するため、『高齢者ケアと人工栄養を考える ― 本人・家族のための意思決定プロセスノート』(2013)、『高齢者ケアと人工透析を考える ― 本人・家族のための意思決定プロセスノート』(2015) を出版しました。いずれも本人・家族らと医療・ケア従事者間の共同意思決定 (shared decision-making: SDM) を支援するためのツールです。また、RISTEX のプロジェクトとして、最期まで自分らしく生きることを支援するための『心積もりノート』(2015) を開発し、frailty 研究の知見を取り入れ改訂版 (2018) を発行しました。

さらに、日本老年医学会「ACP 推進に関する提言」(2019) と「新型コロナウイルス感染症流行期において高齢者が最善の医療およびケアを受けるための提言」(2020) においても、本講座の研究成果が活かされています。また、AMED 研究課題 2 件（柏原直樹班、三浦久幸班、2022）と厚生労働科研の研究課題（三浦久幸班、2024）においても意思決定支援ツールの制作に携わらせて頂きました。

さらに本講座では、臨床実践を下支えする多角的な思想的・倫理的研究を行い、その成果を社会に還元しています。その一つが『医療・介護のための死生学入門』(2017) です。また、山崎浩司特任教授は、共編著者としてグリーフとその支援に関する先端的知見と実践上の留意点等をまとめた『グリーフサポートと死生学』(2024) を出版しました。野瀬彰子特任研究員は、物とは区別されるものとしてのわれわれの精神や生命について論じたベルクソンの哲学の研究を通して、自由と生命をめぐる哲学的・倫理学的問題を考察しています。冨岡薫特任研究員は、専門とする「ケアの倫理」がフェミニスト理論であることを踏まえ、ジェンダー等多角的観点から生命倫理の問題を捉え直すことを試みています。小原優吉特任研究員は、ヘーゲルの哲学の研究を通じて、異なる背景の理解を持つ人々がいかに相互に承認しあうことができるのかという倫理学的な問題に取り組んでいます。



Activities 03

学生教育・リカレント教育

臨床倫理プロジェクトの研究成果を社会に還元する活動に力を入れています。社会還元は同時に、研究成果が臨床現場において実際に有効かどうかを確認し、さらに改善しようとする実践的研究でもあります。

《東京大学文学部・大学院人文社会系研究科における教育活動》

死生学・応用倫理センターは部局横断型『死生学・応用倫理教育プログラム』を提供しています。これは全学に開かれたものであり、一定の単位を取得すると卒業時に修了証が交付されます。本講座教員は「死生学概論」、「応用倫理概論」を含め、数多くの科目を担当しています。

《医療・介護従事者のための死生学》基礎コース

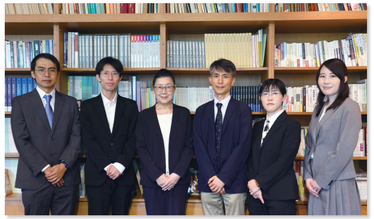
臨床現場で働く方たちが死生についてどのように理解し、どのように医療とケアに活かしていくかを研鑽していただくための活動です。毎年、死生学セミナーとレポート書き方セミナー、およびエンドオブライフ・ケアをテーマとする春季シンポジウムなどを行っています。2025 年度末の春季シンポジウムは「認知症を有する人のためのエンドオブライフ・ケア― Comfort Feeding を目指して」をテーマとしてオンライン開催し、1600 名以上の方々に参加申し込みをいただきました。さらに、本コースの単位として認定する下記の研究会を行っています。受講者は所定の単位を取得し、修了レポートを提出すると、審査を経て修了が認定されます。

臨床死生学・倫理学研究会

水曜日の夜間に年 10 回程度開催しています。死生の問題に関わる分野の方に発表をしていただき、参加者がディスカッションする研究会です。第一線の臨床家や研究者の講演の他、死生に関わる市民の活動、若手研究者の意欲的な研究など、さまざまな場面からテーマを選んでいます。2025 年度はオンラインで 10 回開催し、延べ 4,058 名の方々にご参加いただきました。2026 年度もオンライン開催を継続します。

2025 年度のテーマと講演者（敬称略）

4 月 23 日	「「成人肺炎診療ガイドライン 2024」の意義」 **小宮 幸作**（大分大学医学部呼吸器・感染症内科学講座教授）
5 月 14 日	「チーム医療と臨床倫理―臨床倫理プログラムの実装」 **清水 千佳子**（国立健康危機管理研究機構国立国際医療センターがん総合診療センターセンター長　乳腺・腫瘍内科医長／診療科長）
5 月 28 日	「過疎地域で暮らす人を支えるために～生きかた・活きかた・逝きかた～」 **阿部 智介**（医療法人慈孝会 七山診療所 所長）
6 月 11 日	「腹膜透析患者の peer-to-peer ネットワークがもつ力」 **北村 温美**（大阪大学医学部付属病院 中央クオリティマネジメント部 副部長、DEI イニシアティブ、腎臓内科）
7 月 2 日	「ACP と切っても切れない お金の話」 **福村 雄一**（司法書士法人福村事務所代表司法書士、東大版プロジェクト代表者）
10 月 15 日	「医療における自己決定権の意味―法律家の視点から」 **竹口 文博**（東京医科大学 統合管理室長・腎臓内科客員准教授、弁護士）
11 月 5 日	「共に紡ぐ物語とナラティブブック秋田～患者の「物語」と「語り」の共有による医療～」 **伊藤　伸一**（秋田県医師会副会長、伊藤医院院長）
11 月 19 日	「エナジーサイクルを回せ！―在宅看護奮闘記―」 **亀井 紗織**（株式会社 ナースエナジー 代表取締役、実務教育学修士・看護師・介護支援専門員）
12 月 3 日	「2 つのリスクに備えるために～自然災害と社会構造変化の津波～」 **神野 正博**（社会医療法人財団董仙会 恵寿総合病院 理事長）
12 月 17 日	「倫理的な組織文化とはなにか―医療の組織の中でのあたりまえと倫理」 **勝山 貴美子**（横浜市立大学大学院 医学研究科看護管理学分野 教授）



左から新里優太、小原優吉、会田薫子、山崎浩司、野瀬彰子、冨岡薫

2002 ～ 2006 年度……東京大学大学院人文社会系研究科　21 世紀 COE「死生学の構築」（リーダー 島薗進教授）
2007 ～ 2011 年度……同 グローバル COE「死生学の展開と組織化」
2007 年度……上廣死生学講座発足　特任教授 清水哲郎　特任講師 山崎浩司（総括監督者 島薗進教授）
（東京大学の死生学研究を強化すべく、公益財団法人上廣倫理財団の寄付金により設置）
2011 年度……死生学・応用倫理センター発足（センター長 池澤優教授）
山崎浩司特任講師は信州大学に准教授として転出
2012 年度……上廣死生学・応用倫理講座（上廣死生学講座の改組、拡充）
特任教授 清水哲郎　特任准教授 会田薫子（総括監督者　樋笠哲也教授）
2013 年度……死生学・応用倫理センターに堀江宗正准教授着任。
上廣講座に特任研究員 3 名着任
早川正祐特任研究員は同年度末に三重県立看護大学に准教授として転出
2014 年度……圓增文特任研究員は東北大学に助教として転出、
宮村悠介特任研究員は愛知教育大学に助教として転出
2015 年度……上廣講座に特任研究員 2 名（山本栄美子、田村未希）着任
2016 年度……清水哲郎特任教授が岩手保健医療大学に学長として転出
2017 年度……上廣講座第 3 期開始　特任教授 会田薫子　特任准教授 早川正祐
2018 年度……死生学・応用倫理センターに小松美彦教授着任
2020 年度……上廣講座に特任研究員 1 名（坂井愛理）着任
2021 年度……死生学・応用倫理センターに鈴木晃仁教授着任
2022 年度……上廣講座第 4 期開始　特任教授 会田薫子　特任准教授 早川正祐
2023 年度……上廣講座に特任研究員 1 名（野瀬彰子）着任
坂井愛理特任研究員は追手門学院大学に専任講師として転出
2024 年度……上廣講座に特任研究員 2 名（西岡千尋・冨岡薫）着任
田村未希特任助教が国際基督教大学に助教として転出
西岡千尋特任研究員は京都大学に特定研究員として転出（学振 PD）
2025 年度……上廣講座に特任研究員 1 名（小原優吉）着任
早川正祐特任准教授が京都大学に准教授として転出
2026 年度秋……上廣講座に山崎浩司特任教授着任

東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター 上廣死生学・応用倫理講座
Uehiro Division, Center for Death & Life Studies and Practical Ethics, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

〒 113-0033　東京都文京区本郷 7-3-1　法文 2 号館 3 階 25 号室
Rm. 25, Bldg. Hobun No.2, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 Japan　Tel & Fax: 03-5841-2656
e-mail: dalsjp@l.u-tokyo.ac.jp　https://www.l.u-tokyo.ac.jp/dls

■ 会田 薫子（あいた かおるこ）特任教授
専門：臨床倫理、医療倫理、看護倫理、臨床死生学
医療・ケアを受ける本人とその家族等にとって、よりよい支援はどうあるべきか、臨床現場の専門職の皆様から教えていただきながら、エンドオブライフ・ケアに関することを中心に研究・教育・実践活動を行っています。理論と実践の往還の成果として、日本発の臨床倫理テキスト等も作成しています。

■ 山崎 浩司（やまざき ひろし）特任教授
専門：死生学、社会学、質的研究方法論
死にゆく過程や差別で生じるグリーフ（悲嘆）とその支援について、社会学的視点から研究に取り組んでいます。また、人間の日常実践と理論をつなぐ質的研究方法論である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の発展と普及にも努めています。

■ 野瀬 彰子（のせ あきこ）特任研究員
専門：哲学
人格的な側面とともに自然的・社会的な側面をもつ人間の多層的な理解と他者との対話・関わり合いを生かした意思決定支援がいかにして可能か考える手がかりを、ベルクソンの自由論の発展史的研究および後期の生命論の研究から取り出すことを試みています。

■ 冨岡 薫（とみおか かおる）特任研究員
専門：倫理学
人間は相互依存する存在であるという人間観のもとで、ケアを中心とする社会構築に向けて、倫理学的観点から概念や理論の分析を行っています。特に、ケアの倫理がフェミニズムに根ざしていることを踏まえ、ジェンダー等のさまざまな属性の交差性に着目をしながら研究をしています。

■ 小原 優吉（おはら ゆうきち）特任研究員
専門：倫理学
私たちは時々自分は何をしたいのか見失います。この自分を根底から揺り動かす問いに対し、私たちは自らの歴史を物語ることを通じて自分が何者かを再確認することができます。このような自己理解や相互承認に対する歴史の意義について、ヘーゲルの哲学を通じて研究しています。
教務補佐員■ 新里 優太

協力教員

■ 納富 信留（のうとみ のぶる）教授　（哲学専門分野）　死生学・応用倫理センター長
専門：西洋古代哲学
哲学の起源となった古代ギリシア哲学を研究しており、生と死、魂の問題が大きなテーマです。また、世界哲学の視座から多様な哲学伝統を検討しています。

■ 堀江 宗正（ほりえ のりちか）教授　（死生学応用倫理専門分野）　死生学・応用倫理センター主任
専門：死生学、宗教学
現代のスピリチュアリティ、死生観、サステイナビリティの研究を専門としています。海外の死生学者と協働しながら質問紙を用いた死生観調査をおこなっています。

■ 鈴木 晃仁（すずき あきひと）教授　（死生学応用倫理専門分野）　死生学・応用倫理センター
専門：医学史
精神医療の歴史と感染症の歴史が専門になります。医師や医療関係者の視点と、疾病の視点、患者の視点の三者を組み合わせることを目標にしています。

死生学・応用倫理センター 特任研究員

■ 江川 純一（えがわ じゅんいち）
専門：宗教学・宗教史学、イタリア史
専門は近現代イタリアにおける宗教と宗教研究です。また、フランスの「社会学年報」派における死をめぐる言説の研究を行っています。

BOOKS

日本発の「臨床倫理テキスト」三部作



東京大学出版会，2026

長寿時代の臨床倫理
— 高齢者医療・ケアの考え方と実践

世界一の長寿国である日本では超高齢の患者が増えており、一般成人向けの標準治療が過剰侵襲になり、かえって本人を苦しめてしまう場面も増えています。他方、高齢者差別（エイジズム）によって過少医療に陥るのではないかという危機感も聞こえてきます。このジレンマにどのように対応すべきでしょうか。

必要なのは、過剰でも過少でもなく、本人にとって最適な医療を提供するための理論と実践法です。本書では、暦年齢による一律の判断を避け、ひとりひとりを人として尊重する考え方を第 I 部「理論編」で、判断のあり方と意思決定支援について第 II 部「実践編」で詳述しています。

東京大学出版会，2024

ACP の考え方と実践
— エンドオブライフ・ケアの臨床倫理

人生の最終段階までひとりひとりを尊重した医療・ケアを実現するために、アドバンス・ケア・プランニング（ACP）が必要とされていますが、北米由来の ACP にいかに取り組むべきか、困惑も広がっています。そこで本書では、日本の思想・文化と法・制度を踏まえた日本型 ACP の考え方と実践の方法を提示しています。本書第 I 部は「理論編」。第 II 部「実践編」では総勢 18 名の医師・歯科医師・看護師・MSW・介護支援専門員らが 14 事例について詳述しています。



東京大学出版会，2022

臨床倫理の考え方と実践
— 医療・ケアチームのための事例検討法

《臨床倫理プロジェクト》が研究開発した日本発の臨床倫理の理論と方法論について詳述しています。米国からの翻訳学習ではなく、日本の社会的文化的特徴を踏まえた独自の考え方が、研究者と現場の医療・ケア専門職の長年にわたる協働によって形成されました。本書第 I 部は基礎的な「理論編」。第 II 部「実践編」では、総勢 16 名の医師・看護師・MSW が、意思決定支援に難渋しがちなさまざまな場面の 16 事例について、カンファレンスを念頭に執筆しています。





東京大学大学院人文社会系研究科　死生学・応用倫理センター

上廣死生学・応用倫理講座

2026 Autumn

Uehiro Division, Center for Death & Life Studies and Practical Ethics, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo